

2010年飛翔を期待したい指揮者たち

今年上半期の 日本のオーケストラ 注目の演奏会2010



スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ
(©浦野俊之)

浅岡弘和

●東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団

2月は遂に待望の阪哲朗が聴ける。それもシューマン4番にブラームス2番という大作作曲家師弟の傑作交響曲である。そして3月は飯守泰次郎の「青髭公の城」が要注目。5月からは創立35周年記念企画として飯守泰次郎が再びベートヴェンチクルスを開始する。先頃CDが再発された前回の演奏はベールンライター新版使用の対向配置12型オケという流行の新しいベートヴェンだったのが今回はどうだろう？猫も杓子もピリオド、ピリオドと宣う昨今だが、ベートベンは決して当時のオーケストラのために

●東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団

5月22日、東京芸術劇場で行なわれる第27回定期は音楽監督・常任指揮者三石精一が登場し、今年生誕二百年を迎えるオールシューマン・プログラム。まず珍しい4本のホルンのための小協奏曲へ長調が演奏され、続いては新進ピアノスト佐藤立樹のソロによるピアノ協奏曲「短調」。そして後半のメインは交響曲第3番変ホ長調「ライン」である。近頃円熟の度を著しく増した三石がシューマンの最後の交響曲をどのように表現するか。まことに興味が持てる。

●神奈川フィルハーモニー管弦楽団

まずは1月の常任指揮者金聖響によるベートヴェン「ミサ・ソレムニス」が大注目。地位は人を作るといふか、しかるべき地位に就いた途端、急激な成長を見せた金だが、シュナイトが合唱入りの大曲を得意にしていただけにここでも金の健闘が期待される。さらに3月は神尾真由子と金の共演によるストラヴィンスキーが興味津々、4月は金のマラー3番、5月の創立40周年記念演奏会ではマラー「復活」とさながら常任指揮者金のオンパレードというところか。

●群馬交響楽団

群響の正月はまず広上とリブキンの共演。ハイドンの協奏曲ハ長調と「コルニドライ」が演奏されるが、後半のプロコフィエフ交響曲第7番「青春」もお薦めだ。2月は元都響首席指揮者モーシェ・アーツモンが昨年のN響定期登場に続き、今度は群響の指揮台に立つが、シュベルト「未完成」とブルックナー3番を振るのが大注目。3月は東京でも同一演目で聴けるが、梅田俊明と清水和音によるラヴェルの協奏曲ト長調と、他にモーツァルト「パリ」と「春の祭典」が期待される。

●オーケストラ・アンサンブル金沢

新年は音楽監督井上道義がメラニー・ホリデイらと恒例となった全国ツアーを行なうが、最